

海
花
光

Reincarnation

聖
闘

光

R18
For Adult Only

目次

- ・アラクネ..... p2 ~ p7 魂神
- ・ミノタウロス... p8 ~ p13 わぶき
- ・闇堕ち..... p14 左藤空気
- ・あとがき..... p15
- ・奥付..... p16

Reincarnation

アラクネ

アスナは糸によって一切の身動きを封じられていた。おぞましい蜘蛛の化け物が跋扈する薄暗い洞窟で……。

血盟騎士団にモンスター討伐の依頼が来たのは一昨日の出来事だった。これまで一切確認されたことのない新種のモンスターは手強く、何人ものプレイヤーが犠牲となっている。そういった経緯で副団長であるアスナと数名の団員は調査及び討伐のため、問題の洞窟へと足を踏み入れた。

「これ、本当にモンスターなの……?!」

蜘蛛の糸が周囲に張り巡らされた

団員達が目にしたのは、蜘蛛と人間を混ぜ合わせたような異形の怪物だった。動きが素早く、並のプレイヤーでは太刀打ちできないことはすぐに解った。しかし、団員達を戸惑わせたのはモンスターの強さではない。

「これ、プレイヤーなの……?!」

それは疑問ではなく、確認だった。明らかに戦闘での表記のそれがNPCのそれではない。通常出現するモンスターのそれとは違う。この蜘蛛の怪物にトドメを刺した匂香に、明らかにプレイヤーキルの表記が発生している。

「プレイヤーが、モンスターに……そんなの、聞いたこと無いわ!」
確かに、この蜘蛛のモンスターの特徴として、一体一体の顔や性別がまるで違う。統一されたモンスターの姿をしておらず、それは明らかにプレイヤーの面影を残している。

「一度、撤退を……」

そう決断した時には、既にアスナの周囲に味方は残っていないかった。蜘蛛のモンスターが吐き出す糸に絡め取られ、辛うじて輪郭が

解る程度。繭にされてしまった仲間の団員は小さなうめき声をその中から響かせるのみだった。

そして、アスナ一人が取り残された。

「くっ……」

周囲を見渡しても繭、繭、繭。そして、その繭からは信じたくもない事実が突きつけられる。

「そんな……良かった……?!」

内側から繭を突き破ってゆっくりと姿を現す人影。アスナは一瞬だけ脱出出来たと胸を撫で下ろした。だが、それは次の瞬間に絶望へと変わる。

「プレイヤーが……モンスターに……」

認めざるを得ない。かつて必要以上に自分に好意を持ってくれていた女性団員。だが下半身はおぞましい蜘蛛のソレへと変貌を遂げていた。

「ギギギッ」

人間の顔から発せられた声は、およそ人間が発声できるものではなかった。

繭から生まれたばかりの彼女……蜘蛛のモンスターは、糸で拘束されたアスナを発見すると、生まれたてで覚束ない足取りで不器用に蜘蛛の複数の脚を交差させながら近付いてくる。その下半身、股間の中央には蜘蛛の口とも言える牙と、そしてだらりと垂れた生殖器があった。

「アハア……フクダンチョウ? ダレ? ドウデモイイ……タベル、オカス、フヤス」

モンスターという存在へと転生を果たしても、副団長であるアスナへの秘めた愛は残っていたらしい。繭へと閉じ込めて仲間を増やすという行為よりも、生殖を優先させたのはそのせいかもしれない。



Reincarnation

「や、やめて！ やだよ、こんなの！」

身動きができないアスナに、元団員のモンスターはグロテスクに変貌した下半身から、まるで極太のゴムホースのような生殖器を伸ばし始める。

「ひっ……」

それをアスナに見せつけるかのように眼前で揺らして見せると、その先端を、頭となったアスナの下着へと擦り付け始めた。

「ひやつ……いやつ、やめて擦らないでえ……！！」

又チャリ、又チャリと生殖器の表面から分泌されている粘液がアスナの股間を覆う下着へと染み込んでいく。ゲーム内での倫理コードが強制的にオフにされてしまったかのような感覚がアスナを襲った。

（そんな、どうしてこんなに、感じちゃうの?!）

この蜘蛛のモンスターはシステムを侵食する文字通りのバグのよきな存在だった。人間のプレイヤーの種族を強制的にモンスター化してしまうばかりか、各種のステータスや、システムで守られているコードまで書き換えることが出来てしまう。アスナはそう判断した。判断したとはいえ、これ以上どうすることも出来ない自分に対して、無力感と羞恥心から涙を流す。

「う、ううう……」

「ギギアアア!!」

蜘蛛のモンスターは一層の雄叫びを上げた。それは準備完了を意味していた。

「何を、まさ、か……」

今眼前のモンスターが何をしようとしているのか、理性よりも本能的に察した。

「だめ！ だめだめえ!!」

泣き叫ぶ。だが、その声は誰にも届かない。アスナが今まさに犯されようとしている背後では、繭にされたプレイヤーが次々と孵化を始めていた。

「ギギギギア!!」

「ガアアアアアア!!」

それぞれに雄叫びをあげて、外の世界へと躍り出る異形。

「やめ、おねが……ッ」

その懇願は、無慈悲な挿入によって打ち消された。

「やだ、抜いて！ 抜いてえええ!!」

まるで槍で刺し貫かれたかのような激痛。入るとは思えない太さの生殖器がミチミチと音を立てて、アスナの秘部へと潜り込んでいく。

「か、は……はあつ、はあつ、痛、い……」

異形と成り果て、人間だった頃の感情を歪んだ形で、身動きの取れない愛しの相手へとぶちまける。生殖器を前後に脈動させ、アスナの身体が大きく揺れる。その都度アスナは息継ぎにも似た喘ぎ声をあげる。

「いやつ、あつ、おねつ、がいつ、やめ……」

だが、異形はアスナの身体を弄び続ける。モンスター化したとはいえ、現実の世界では人間のままなのだ。意識は異形に乗っ取られ、人間としての快楽はそのまま得ることが出来ていた。

「あつ、うあつ」

（こんなのって、ないよ……助けてキリトくん……）

心の中でアスナは最愛と思う存在の名を呼んだ。

例えゲーム上であつても、自分の大切なものを無残な形で散らされる苦しみと悔しさは耐えられるものではなかった。

（私、このままじゃ……）



耐え難かった痛みも、いつの間にか自分の快楽を刺激するものへと変化していった。

ズチュツズチュツ

一層生殖器の動きが激しさを増し、アスナは壊れた人形のようにガクガクと頭を揺らしながらその荒々しい愛を受け止めさせられた。

「あつ、あつ、うつ、はあんっ！」

その声にはいつしか艶めかしいものが混ざり始め、アスナはその激情の波に翻弄され続ける。そして、生殖器が一瞬痙攣したかと思つた矢先、けたたましい水音が周囲に響きわたった。

「お……お……」

半ば白目を向いて、アスナは仰け反る。秘部には蜘蛛のモンスタ―の夥しい子種の液体を流し込まれた。

その後、アスナは精神が擦り切れるほどの陵辱を受け続けた。

(私、どうしたんだっけ……)

いつから自分の意識が消えかけていたのかも曖昧だった。

(きもちいい……ここにいたい……いたいのに……)

今は暗く、温かい液体に包まれたどこか、にいる。

(早く生まれないと……)

なぜそう思ったのかは分からない。

(どうして、生まれるの？ 私は……)

心地よいこの場所にずっといたいという思いは強いが、それとは別に一刻も早くここから出なければならぬという思いも増幅されていく。

(私？ 私って誰だっけ……)

自問自答。自分という存在が何なのか、それがはつきりしない。名前すら浮かんでこなかった。

(わからない……なにもわからない……)

存在は認識できていても関わらず、記憶の一切が抜け落ちていく。

(ああ……でも……)

そう、一つだけ、何故かは分からないが自分が何をすべきかだけはハッキリと刻まれていた。

(生まれたら、増やさなきゃ……)

何を増やすのか、アスナにはわかっていて。

(仲間、仲間、仲マ、ナカマ……)

意識が明瞭になるに連れて、心から消えていく人間性。

(ウマレル、ウマレル、ココカラデル！)

高まっていく感情。何かに包み込まれて穏やかだった心は、今や誕生への高ぶりで完全に理性を失いつつあった。

ブシヤア！

数多ある繭の一つに亀裂が入り、そこから大量の羊水が噴出した。そこから覗いたものは異形の手。そして次第にその手の元が頭となつていく。逆だった毛に覆われた腕。

(……まぶ、しい)

繭からゆっくりと姿を現していく。溶け落ちた血盟騎士団の衣装。それを着ているのは紛れもなく結城明日奈だった。だが、下半身が姿を見せるとそれが人間ではなくなったことを如実に示している。そして、ゲームのステータス表示が不意に現れる。

『Reincarnation』

それは転生を意味する。そう、隠された状態表示。パラメータが今、アスナにも適用された。

「ギギギ……」

Reincarnation



喉から漏れる声のような音。長く鋭い幾本もの脚が繭からゆつくりと伸び、そして外の世界へと躍り出る。

(アア、ナント、スガスガシイ……)

うつとりと外の空気を、羊水に濡れた肌に浴びてアスナだったものは目を細めた。

「アハハ、フヤス、タベル、フヤス……ッ」

アスナをリーダーとする派遣された血盟騎士団は全滅した。

派遣された団員すべてがモンスターへと転生し、もとのプレイヤーレベルを兼ね備えた強力なモンスターが量産されてしまった。アスナもまた、

派遣された血盟騎士団数名が帰らない。その情報を受けてさらに再度の調査・征伐ミッションが組まれたが、その尽くが失敗に終わった。その驚異はすでに放置できるものではなくなり、血盟騎士団以外の上位プレイヤーにも依頼がかかる程になっていた。

だが……

「ギギギイ！ ナカマ！ ナカマフヤスウウ！！」

一匹のモンスターと化したプレイヤーが、今まさにプレイヤーを繭に閉じ込めようとしていた。

「アスナ！ こんなことはやめるんだ！」

だが、その叫びも糸によって塞がれていく。かつての最愛の人でさえ、彼女にとってはもはや素材の一つでしかなかった。

「ワタシ、フヤス、ナカマ……アス、ナ……」

(だ、れ……?)

キリトの必死の叫びで一瞬、自分の名を心の中で反芻するも、それはすぐにモンスターとしての習性、本能によってかき消される。眼前で自分の糸で包み込まれ、繭となっていくキリトを満足そう

に眺め、転生したアスナはさらなる素材……プレイヤーを求めてその繭をあとにした。

プレイヤーからモンスターへの転生システム。その驚異はやがてインクラッド全階層へと伝播していくことになる。

B A D E N D



ミノタウロス

『モロクの呪い』という特殊能力を発動する個体が存在する。発動条件は様々であるが、一定のダメージを与えると高確率で発動する。

この特殊能力の恐るべき点は、挑んだプレイヤーを己の眷属としてしまうことである。

変貌までの時間は五分の猶予が与えられるが、それまでに特殊個体のミノタウロスを倒さなければならない。

しかし、徐々に眷属化していくことで、本来のステータス上の能力を発揮できず、ジリ貧となって眷属化してしまうプレイヤーが数多発生する。

この結城明日奈というプレイヤーもまた、一度ミノタウロス討伐を経験したことから単身で挑んでしまったことが不幸の始まりだった。特殊個体であることは表記上確認することができないため、通常個体と見分けが全くつかないからだ。

哀れにも『モロクの呪い』を受けた彼女は、腕が眷属化し始めたことで、普段の剣技を発揮することができなかった。

ついで脚、胸とミノタウロスの眷属のソレへと無情にも変貌していく。

なお、眷属化が進むに連れて思考も人間のものとは置き換えられてしまい、完全なモンスターと同じ行動を取るようになってしまう。……そして、五分という時間はあっという間に過ぎ去ってしまった。



完全に眷属化が完了すると、プレイヤーでありながら自由な行動を取ることが完全にできなくなってしまう。

特定のダンジョンで主であるミノタウロスに従ってプレイヤーを襲うようになる。自我は一切存在せず、NPCにも似た行動となってしまうため、自力で逃げ出すことなど不可能である。

(思考が失われていることが、逃亡不可能の最大の理由)

外見全体もミノタウロスのソレと近いものへと変貌し、武器も専用の斧が与えられる。

なお、プレイヤーだった頃のステータスはある程度引き継がれるらしく、上位プレイヤーが眷属化した場合は非常に厄介な存在となってしまう。血盟騎士団副団長であり、閃光とまで謳われた彼女の場合は、眷属ながらダンジョンのボス級の強さを誇る。

なお、女性プレイヤーが眷属化した場合の最大の難点は、主と繁殖活動を行うことであろう。

『モロクの呪い』を発動出来る個体を、延々と生み出し続けるため、早急に対応しなければダンジョンはミノタウロスで溢れることになってしまう。加えて、該当のプレイヤーのスキルまで引き継ぐらしく、鈍重な外見に似合わず閃光のような俊敏さを持ったミノタウロスが誕生するといった事例も発生する。

今回がまさに、その最悪の事例だった。



「イツツ・ショウ・タイム」
二人分の唇が、同じ形に歪む。





あとがき

今回もお買い上げくださって
まことにありがとうございます！

突発ですが、アスナ本です。

実は相当好きなキャラでして……。

今回も多数の方に協力頂き、感謝に
耐えません。

ゲーム内のアバターがモンスター化！

脳内でこういうのが見たい見たいと

増幅した結果が今作というしだい。

次回はセーラームーンに復帰
したいと思います。多分、絶対。

映画化もありますし……。

また盛り上がってくれると

最高ですね！

それでは、また夏コミでお会い
できれば！



< 奥付 >

作品名：汚れた閃光

発行：墮落事故調査委員会


代表者：シューミット

発行日：2019年12月30日

印刷：PICO(プリンティングイン株式会社)

メール：sch-mit@goo.jp

pixivID：sch-mit



Reincarnation

Presented by
墮落事故調査委員会

18歳未満の方の購入は固く禁じます